

三番目のはづき

棒状の抹茶チョコ克蘭チが整列してる――。

いづみが車窓から見た時の感想だ。

そのチョコ克蘭チが並ぶ濃い緑の大地から見上げた空は、雲一つ見当たらない。目に入りそうになった汗を拭うと、緑と青の世界にただ一つ彩りを添えているカラフルなパラソルの影に滑りこんだ。

帽子を取って、カラカラと音を立てる大きな水筒からスポーツドリンクを注ぎ、一気に飲み干した。遠くから聞こえてくる蝉の聲が、一層暑さを感じさせる。

正直、もう帰りたい――。

急遽、招集された茶摘み要員、それがいづみだ。

てか、親戚やからっていきなり中学生を一人でよく知らんおばさんの家に派遣しないでもらいたい。

いらっしやい、いづみちゃん。五歳の時に一回会ったでしょう。覚えてる？ 別嬪さんに育って、まあ可愛いこと――。

なんて言われても覚えとるわけなか。

夏休み真っ只中、学校体育館の急な工事と市の体育館の予約が取れなかったことで、部活動はぼっかりと五日間の休みになった。かと言って、このうだるような暑さのなか外に出かける気にもならないし、自主練をする気にもならなかった。

あのメンバーじゃどうせレギュラーは取れんことも分かつとるし――。

多少いじけながら冷房の効いたリビングで、テレビを見ながら棒アイスを齧っていた昼過ぎ、家の電話が鳴った。電話を取った母は少し雑談をしていたが受話器を置くと、唐突にいづみに言い放った。

「あんた、今から千鶴おばさんとこ行つてこんね。五日間くらい」

「へ？」

長崎からバスに揺られること一時間半。母のひと声により嬉野市で茶摘みをしている千鶴おばさんの家にやってきたのである。

「いづみちゃん、塩アメも食べとかんね」

首に巻いたタオルで汗を拭きながら千鶴がパラソルの影に入ってきた。

いづみは「はい」と答えながらアメを口に放り込んだ。

いづみにとっては昨日の今日会ったおばちゃんであり、千鶴とはまだ距離がある。若干気まずいとはいえ、休憩をこんなに早く終えたくないし、無言というのも居心地が悪い。

何か会話を、と考え、いづみは質問を捻り出した。

「今摘んでる葉っぱって、高級なお茶になるとよね？ どんな味？」

「まるやかで渋みが少なくって、飲みやすいって感じかな。でも、今摘んでんのは三番芽っ

て言つて、高級な嬉野茶には使われない葉っぱやね」

「えっ、ここで育ててるのに嬉野茶になれんと？」

「そおねえ。この時期だからなれんとよ。四、五月頃に摘むのが一番芽、六、七月頃に摘むのが二番芽って言うっちゃけど、それが嬉野茶になるったい。ほら、春は葉っぱが柔らかくて、夏は硬いイメージない？」

「たしかに」

「柔らかくてうまみを溜め込んだ一番芽が高級になるけんね」

いづみはさきほど摘んだ葉っぱをカゴの中から取り出し、指先でつまんでクルクルとまわした。

「高級茶になれんことが初めから分かつとる葉っぱかあ。なんだか可哀想だね」

「可哀想？」

いづみの言葉に千鶴は瞬き、穏やかに笑つた。いづみのカゴから同じように葉っぱを手に取り、ずいっといづみの顔の前に突き出した。

「でもね。この葉っぱはすごいっちゃけん！」

「すごい？」

「高級なお茶は限られた人しか飲まんでしょ。でも、この三番芽は番茶と言つて、美味しいけど安く売られるから、たくさんの人に飲まれるったい」

いづみはあつ、と声を上げ、「じゃあ、うちのお母さんがいつもご飯あとに飲んどるのも？」

「そう、この三番芽」

「へえ」

おじさんがギックリ腰で動けないから、と急遽まわってきた茶摘みの依頼に、母が快諾し、いづみを派遣した理由が分かるというものだ。

「そして、この硬くてしつかりした三番芽には、一番芽には真似できない特技があるんですよ……」

声を潜め、真剣な表情になつた千鶴に、いづみはゴクリと唾を飲みこんだ。

「……その特技とは？」

「天ぶらに最適ったい！」

「天ぶらっ」

千鶴の掲げた三番芽にいづみは飛び付いた。天ぶらは大好物だ。

「じゃあ、今日の晩御飯は天ぶらにしようか」

「やったあ、天ぶら、天ぶらっ」

嬉しさのあまり、いづみはその場でびよんびよんと跳ねた。

「よーし、あともうひと踏ん張りしますか」

「はい」

いづみは帽子をしつかりと被ると、パラソルの影から緑の大地へ駆けだした。